

ふんねる " 風 "

第54号 (2010年11)

風に吹かれて (33)

白井啓治

『緋の色を抱いて何時まで彷徨うのかと秋の声』

心に咲く花の色は、と問われれば「全てを焼きつくす様な真つ赤な色」と迷わず私は答える。自然の風景においても新緑の季節よりも燃え上がる紅葉の季節が好きである。

燃える色が一瞬の如く散り落ちたら全ての色を消し去って雪国であれば白銀の世界が、雪国ではない里山にはモノトーンの世界がやって来る。

大人になるまでは雪国育ちであった私は、春から夏のダラダラとした色とりどりの花の風景よりも、秋の一瞬にして全体が燃え上がる紅葉と潔く全ての色を散り落して白銀に埋もれてしまう世界の方が好きで、心を移入することが容易である。

これは全く個人的、内面的なことなのであるが、妥協のない、容赦のない赤の一意ほど心に迫って来るものはない。命がけの恋を己の生きる軸とした者にとつては、隙間の無い赤こそが色と言える。先日、新聞に懐かしい名前を見つけた。

相沢靖子である。作詞家を目指していた彼女の初めてのヒット曲が「サルビアの花」であった。

彼女とは、劇団「積み木座」をやっていた平松仙吉氏の付き人の様な形で来ていた時に知り合っ

たのであった。5〜6歳下であったと思うが、同じ東京の外れ狛江市に住んでいたこともあり、また女房とも気が合って、時々家に遊びにも来ていた。

彼女とはよく新宿で飲んだ。彼女が失恋するたび、深夜に呼び出され、演劇の関係者や歌の世界の精神的不健康な連中の集まる店に行つて夜が明けるまで飲んだ。

この夏に、ギター文化館で行われたバーベキュー会に行つた時に、ギタリストの一人から浅川マキなんて懐かしい名前を聞いたが、彼女なんか不健康に頹廃ぶつたブスデブ(愛をこめて)であることを忘れて、こんなに良い女を解らない男は馬鹿だと、管をまいていた。

「サルビアの花」がヒットした時、靖子女史には「恋女房持ちの俺に勝手に恋をして、振られたの何だのと因縁をつける気か」と冗談を言つて大喜びしてやつた。もう何十年前の事だろうか。

後期高齢者といわれる歳になつても、いまだに容赦のない真つ赤な花を心に思い、恋を叫び続けている俺は救いようのない馬鹿かもしれない。

しかし、今の私の心から、容赦のない真つ赤な色が褪せていったら、私はもう私でなくなつてしまふだろう。当然のことながら、小林幸枝に「常世の国の恋物語百」を書いてあげましょうとは言

えなくなつてしまふ。

未だ二十六話なのだから先は長い。そう簡単に赤の色を褪せさせるわけにはいかない。体力が無くなって来たのであるから、裡の熱情だけは益々燃え上がらせていなくては、と思う。

石岡の友人に唆されてという人聞きが悪くなるが、夏ごろから「ユツキーとヒロ爺」と題してブログを始めたのであるが、現在八十日あまりが過ぎた。時々、大変になつて休もうかと思うのであるが、友人が休むことなく続けているので、私も負けじと頑張っている。

ネタ切れというわけではないのであるが、折角だから常世の国の恋物語百に挿入した、舞のための恋歌を二十日ばかりにわたつて紹介してみた。

小林幸枝と出合い、彼女の舞う恋の言葉の美しさに魅せられてから、彼女が舞う為の恋歌を随分と沢山詠い、物語の中に挿入して来た。それらをブログで紹介しながら、今更のように、言葉というものには歳をとらないことに気付かされた。

詩だけを読んだら、おそらくその詩を詠んだのは後期高齢者だとは思わないであろう。改めて言葉というものの不変性について考えさせられた。

勿論、時代の変化と共に言葉の使い方や意味も変化してくるのではあるが、心を詠う言葉の不老長寿は事実のようである。

古今和歌集の恋歌を今読んでも、心締め付けられる男女の恋慕の情は切実に迫つて来る。当風の会の打田昇三兄が常々いつている『言葉を文字に表現できるのは人間だけ。文章を書くのが嫌だという人は人間を放棄した人だ』とはまさにその通り。不老長寿の妙薬を求めるよりも、永遠の言葉を紡ぎたいものである。

他人の身の上話など、興味ないかもしれない。しかし、私の天職・獣医師という職業は、華やかさはなく、とても地味だが、かなり公共性の強い職業でもある。人畜共通伝染病の蔓延防止など、日本の衛生面をもっと向上させるためにも、ご協力のお願ひも兼ねて、紹介する。

どうも獣医師という職業は、縁の下の力持ち的存在だ。社会一般に、その仕事内容は、あまり知られていないが、もし、この部門を担当する者がいなくなったら、それは大変なことになる。獣医師は一般市民からは、犬猫など、ペットの診療ぐらいしか認識されていないかもしれないが、その他の仕事は無数にある。そんなことまでやっているの？…と驚くほど範囲は広い。取扱動物の種類も非常に多い。

さて、人間の医師は、多くの理化学的検査の下に、患者を診察し、ネットワークを駆使し、最適な手段を講じて診療にあたる。多くの法的な制度の裏付けもある。社会において重要な存在だ。

一方獣医師は、動物から問診もできず、物言わぬ動物から、(勿論血液検査・X線・エコーなどは実施)病状を読み取り、適正対応をしなければ、決して病気は快方には向かわない。その点、医師よりもかなり、困難な医療とも言える。

しかも臨床獣医師は、内科、外科、産科、耳鼻科、眼科、整形外科など、何でも一人でやらなければならぬ。最近でこそ、助手的存在の、獣医看護師なるものが、いるようになったが、以前は事務員なり、畜主にその任に当たってもらった。更に、診察にあたる動物の種類は、昆虫(ミ

ツバチなど)、魚類、両生類、爬虫類から、鳥類、哺乳類まで、数限りない。そして人に飼われる動物だけではなく、全く野生の動物を診療する機会も多くなった。並大抵の知識や経験では、とても太刀打ちできない。

それなのに獣医師は、同じ6年生の大学なのに、給料は医師とは格段の差だ。(父親の私が定年に近い頃、内科医の娘の初任給は、父の2倍以上であった。)国立獣医大学の受験偏差値は最近、非常に高い。待遇は良くないが獣医師希望はとて多く、獣医学科併設希望の私大が、最近非常に増えている。

又一方、行政を担当する獣医師は「人獣共通感染症」など、動物の病気を、人間に感染させないため、法で定められた「病種」について、防御対策を日頃黙々と実施している。例えば市民が安心して飲む毎日の牛乳は、我々獣医師が、全ての搾乳牛を検査して、人畜共通の「結核」に感染していないことを証明した牛から出た牛乳でなければ、ミルクは市場に出回らない。牛肉についても牛海綿状脳症(BSE)狂牛病)など、牛から人間に移らないよう、その経路を徹底して、遮断する方法が取られている。

その他、1才もある種牛など、検査の時、暴れるので、一つ間違えばこちらの命にかかわる。オーストラリアの原野育ちの肉用子牛など、検査しようとして近づくと、2メートル近い馬せん棒を飛び越える。まるで、ハイジャンパーだ。競走馬の2歳の若駒や、種牡馬など、並大抵のわざでは御しきれない。ダービーに出走するどんな有名馬でも、我々の「馬伝染性貧血症」という法定伝染病にかかっていないという証明がなければ、競馬に出場することは

できない。

この度、宮崎県の口蹄疫対策に応援に行つたある県の獣医師は、暴れる牛を避けきれず、眼球破裂で失明した。骨折者も多数出た。

又、同居する私の長男も県の獣医師で、宮崎県に応援に行つたが、業務終了後、自宅に持ち帰つた物は、防水の腕時計と防水の携帯電話だけ。下着上着、靴、かばん、財布など全て焼き捨てて帰つてきた。更に頭髪も坊主になって。しかも帰宅後は5日間足止め。鼻・耳・膺など、ウイルスが残っている可能性があるため、日頃動物に触れている私とは、接触禁止。そのため、同居でも会話は電話で。

法律で72時間以内に穴を掘つて埋めると言われても、集中豪雨の最中で、自衛隊が穴を掘る先から湧水・壁が軟弱で崩れ落ちるなど、遅延として進まず。現場を知らずに、机の上で考えた法律通りになど、到底、事は進まない。先の鳥インフルエンザの時もそうであったが、行政獣医師の防疫活動は、人様の貴重な財産を、強制的に処分するなど、怨みこそ受けるとも、感謝などされることはない。まして牛など、飼育者は、人間の子供を育てるように愛情を注いで育てている。法律上とはいえず、それを非情にも、強制的に処分しなければならぬ苦しさ。獣医師は、動物を生かす為に命をかけているのに…この矛盾。涙なくして仕事はできない。

【なのに週刊誌などは、宮崎で本当にあのようになに牛を全て殺さなければならなかったのか? などと書いているが、どのような事情があるにせよ、口蹄疫ウイルスに感染した疑いのある動物を生かしておけば、次の感染源となり、知らぬ間に感染

が拡大し、より大きな被害をもたらす源になる（人間の伝染病患者の隔離とは話が違ふ）。国際的にもワクチンを打って一時沈静化を図ったり、完全な原因除去ができなかった場合、清浄国のお墨付きは、ただだけない。永遠に汚染国として相手にされない。

優れた系統の「種牛」など、育種家が何代にもわたり、系統繁殖を繰り返して、選抜し、良血を積み重ねたものだ。血の出るような努力の結果だ。20年・30年ぐらいで成し遂げられる簡単なものではない。正に国宝級の宝物だ。それは分かるが、どんな価値あるものでも、それが後の世に「禍根」となる可能性があるのならば、冷酷なようだが、処分せざるを得ない。法律とは、より多くの人の安全を守るために存在するので、人情に流されるわけにはいかない。マスコミなどが、一部の学者や当事者の声を大きく取り上げ、いかにも正当であるかのごとく報道するが、物事は、単眼視してはいけない。複眼で物事の真髄を見抜かなければならない。

【私（の役所）は、現役時代、ある畜産農家から、自分の家畜がこの病気にかかったのは、行政の対応が不適切だからだと、警察に告発された。私は警察の取り調べ室で、任意ではあったが、色々なことを調べられた。私は、1年間に11回も、予防注射や消毒の徹底についての広報リーフレットを発行し、啓蒙に努めていた。（農家は昼忙しいというから、夜、公民館などで啓蒙の講習会を何度も開いた。しかし出席するのはまじめで、しっかりと義務を果たしている篤農家ばかり。聞いてほしい肝心の人《義務不履行者》は出てこない。）これらの証拠品を提出したら、直ちに提訴の不当性を

認め、却下してくれた。自分の権利のみを主張して義務を果たさない悪弊。自分の果たさなければならぬ義務を棚に上げ、すぐに提訴して、行政の弱みに付け入ろうとする。こんな現象は、しばしば見られるが、これは、成熟した真の民主主義国家とは、到底言えない。】

家畜に対する人情。殺生を禁じた仏教的な風土。これも「米」で生きてきた日本の体質であり、畜産で生きてきたヨーロッパなどでは、家畜≠食糧なので、利処分の感傷などありはしない。国民の重大な食糧である家畜に一々感傷がまつわつていては、收拾がつかないとする気持ちも分からないではない。

【論理の飛躍かもしれないが、同じ哺乳類である家畜を、日常、食糧として屠利する習慣のヨーロッパ系白人なればこそ、なんの「ためらい」もなく、広島・長崎に、非戦闘員の一般人を、大量殺戮する原爆投下ができたのではないか。ヨーロッパ列強が南北アメリカ先住民を、根こそぎに殺戮しまくったのではないか。次々に強力兵器を開発。それを型式が古くなれば後進国に売りつけ、武器産業の隆盛を図る。そして先物取引などでの、世界の誰が泣こうが、オレさえ儲ければそれでよいとする体質。無軌道な証券市場など。長年仏教や儒教で教育された東洋人には、思い及ばぬ発想である。】

さて獣医師は、牛に関しては乳房炎の最悪の病原菌「多剤耐性緑膿菌」など、もし検査中に感染したら、こちらの命にかかわる強敵と、培養・鑑定など、日夜闘っている。ペット獣医師も大変だが、産業動物獣医師は、殆ど毎日、命を的に闘っている。

豚も体の構造は人間によく似ているので、丹毒トキソプラズマ、炭疽（たんそ）など人畜共通感染症が存在するが、それらに感染しないか1頭1頭全部検査して、合格したものしか、食肉として市場に出回らないようになっている。おそらく世界で、日本が一番安全な検査体制をとっている。

（世界を旅して、多くの方が、治安と衛生は、日本が世界一との印象をお持ちだと思う。）アメリカなど給料の高い獣医師に、そこまで細かい検査をさせてはいないので、かなり「雑」である。（逆にいえば、日本の獣医師は、それだけ安い給料で、高度の検査業務を実施しているということ。）その他、病原菌の侵入経路の探索のため、DNA鑑定なども常時行っている。又、発がん性物質や農薬の残留など、警察の鑑識に劣らない微量検査の精密検査も日常業務である。更に食肉のO157病原性大腸菌など徹底して検査して、安全なもののみ、市場に供給している。言ってみれば、我々の愚直なまでのルーチンワークにより、日本の食の安全性は確保されていると自負している。

鶏も、先日アメリカで、鶏卵3億8千万個を、市場に出たものを回収する騒ぎがあったが、人間に共通のサルモネラ菌に感染した疑いであった。これも我々日本の獣医師は、日頃ニワトリを検査している。

さて、「狂犬病」は、人間を始め、殆どの哺乳類に感染する最悪の伝染病である。しかし、国によっては「犬肉」を食する習慣があるし、日本やオーストラリア・ニュージーランドを除いた殆どの国で、狂犬病は清浄化されていない。陸地続きでは媒介する野生動物などの問題もあり、絶滅は非常に困難。その点日本など島国は、その気になれ

ば根絶は可能。

2009年度、国内で飼われている犬の数は、1332万頭（ペットフード協会調べ）といわれ、5世帯に1世帯が犬を飼っていることになる。ところが、1950年制定の狂犬病予防法で、全ての犬は、狂犬病予防注射が、義務付けられているが、国内の予防注射率は、現在ほぼ半分を割っている。（茨城県に犬がほぼ30万頭いるが、2009年度狂犬病予防注射頭数は135,013頭である。その率は45%にすぎない。）

最低の免疫獲得率80%を確保しなければ、伝染病というものは、一端発生があれば蔓延を防止できない。（牛の流感、豚のコレラ、鶏のニューカッスル病など）これらは、私の50年間にわたる家畜防疫経験からの、教訓である。勿論、空港や港で輸入検査は厳重に行っているが、密輸や、渡り鳥、場合によっては大陸から飛来する黄砂等、常に危険が付きまとう。台風巻き込まれて飛んでくる熱帯の吸血昆虫、旅行者の靴についた泥や、得体の知れない土産物などから、いつ何が侵入してくるか分からない。

最近北海道へ行って驚いたことには、ロシアの漁船は犬を守り神にしており、漁船が日本の港に着いたとき、犬が無断上陸し、帰りには行方不明となり、地元では見慣れない犬がウロウロしている。勿論、狂犬病に罹っていれば、船内で問題が起きていただろうが、元氣だから上陸したとはいえ、もし、病気の潜伏期間中だったとしたら、背筋の寒くなるような事態が想像される。

【ペットを飼育する者は、必ず、その基礎となる法律を厳格に守るべきだ。狂犬病など最悪の伝染病がすぐ近隣の諸国に常在する今日、社会モラ

ルの低下は極めて憂慮すべき問題だ。日本は島国

なので、何とかなっているが、一端国内に狂犬病が侵入したら、手も足もつけられないような始末となるだろう。国民の命を守るためには、違反者には、どんな厳罰を科しても、厳しすぎることはない。個人の権利とか、自由とか、屁理屈を言って、義務を果たさない近年の風潮は、民主主義の根幹を揺るがすものだ。違反者が一人病気になるって死ぬならそれは構わないが、伝染病というもの、多くの人に、甚大な影響を及ぼす。義務付けられた予防注射や消毒をサボり、近隣に被害を拡大させた家畜伝染病蔓延の実例を私は多数見てきた。もし、狂犬病の予防注射を受けない違反者がいたら、不幸な未来を招かぬためにも、勇気を持って注意・諫言してほしい。それが地域安全の基本だ。「風」51号に書いた、フロリダで大蛇が大繁殖の話は、ペットの飼育放棄か、管理不行き届きによる逸走であろう。大蛇がワニの子供を飲み込むほどの生態系の乱れようである。個人主義の尊重は分かるが、マクロで物を見たとき、アウトローへの日頃からの強い干渉は、絶対不可欠だ。】

さて、日本では、人間の狂犬病発生は、昭和32年（1957年）が最後だが、1970年ネパールからの帰国者1人、2006年フィリッピンからの帰国者2人がそれぞれ国内で発症し死亡している。いずれも現地で狂犬に咬まれたものだ。

【狂犬病危険国への出張や旅行は、必ず本人が、狂犬病予防注射を実施してから行くこと。旅行会社のいう『必要ない』は信用できない。客が欲しいだけ。怪しげな犬は、どの国にもウロウロしている。咬まれなかったら、それは偶然で、運

が良かっただけの話。吸血コモリだっている。外国が、日本の衛生や治安の良さの延長だと思ったら大間違い。甘すぎる。テロでも誘拐でも、何でも有りだ。】

人間が狂犬病に感染すると、見るも悲惨な症状を示し、狂い死にする。諸外国では、キツネ、スキャンク、アライグマ、アナグマ、コモリなど自然界でキャリアー（病原菌媒介者・保菌者）がワенсаという。これらをコントロールするのは、ただ事ではない。国家として、人や家畜の防護対策に万全を期し、統計を公表することだ。これを隠すなど論外だ。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会は、自分達のふるさとである石岡市を中心とした常陸国の歴史・文化の再発見と創造を考える会です。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと、会報「ふるさと風」を毎月発行しております。ふるさと風の会では、ふるさとの暮らしと文化について、真面目に考え表現したいと思う方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会（雑談と情報の交換会）を行っております。会費は、会報作成費他として、月額2000円です。入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会事務局 〒315-0001 石岡市石岡13979-2 (白井方)

「国土」というものは、決してその国民のみの物ではない。島国を除き、「国境線」など、単にペーパーの上に線を引いただけのこと。自然界の動物や塵灰の流動、川の流れ、気流等は、自由自在で、国境などありはしない。チェルノブイリ原発事故の国境を超えた巨大な被害を見れば、すぐ分かる。国内のトラブルは「恥」として隠してはならない。すぐ他国に影響するのだから情報公開するべきである。それがしつかりできてこそ、はじめて成熟した一人前の国家といえる。

このことは、国土だけではなく、個人の所有する「土地」についても言える。耕作放棄で雑草が繁茂すれば、隣接農地はその種が飛ぶ。(オーストラリアの牧場を視察した際、広大な牧草地に雑草が生えていないのに私は気づいた。わけを聞いたら、農地に雑草をはやしたら、近隣に迷惑をかけるので、村八分になると言っていた。)屋敷内に巨大な樹木が繁茂すれば、隣接民家が日陰になり、落ち葉など迷惑千万。良識を持って善良なる管理をしなければ、真の「ふれあい町内会」など、できらぬわけがない。

さてその他、獣医師の仕事は、動物園・水族館の展示動物の病気の問題。更に先に問題になった鯉ヘルペスウイルスやミツバチ腐蛆(ふそ)病など、社会に重大な影響を与えうる動物の感染症などは、我々の守備範囲である。更に、食中毒・食の安全性監視・動物薬事監視・動物愛護・野生動物保護など数えきれないほどの業務を担っている。さらに乳業関係、食品関係、飼料関係、育種関係、教育関係、薬品開発、貿易関係など無数の職種を抱える。

(なお、ペットの診療費については、「不透明」

などの話を聞くが、その理由は自由診療制のためで、公的医療保険などと違い、公定価格はない。標準価格を定めることは、事業者団体による競争制限にあたるので、独占禁止法で禁じられている。)

獣医業務について、支離滅裂に多くの例を挙げ、書きまくった。少々グチッポイことにも触れた。私は、社会から尊敬や感謝などなくとも、これが天職と思えば日夜愚直に励むのみ。縁の下の力持ちで十分。科学技術を根拠に、公共の利益のため、いずれに偏るのでもなく、公平に職務を全うすることに、ささやかながら、誇りを感じている。

観光巡回車

兼平ちえこ

「石岡駅より、若松町↓東京電力↓交差点を通り越し、次の信号を左に折れ(右は柏原池へ)、風土記の丘のために作られたという広い道路をひたすら風土記の丘へ。そして、ふるさと農道に入り、畜産センターを左にしながら右カーブを走る。まもなく右側は泰寧寺、左側には小高い富士山の前に悠々とそびえ立つ筑波山。この雄大な景色も名勝の一つになりそう。この景色を保ちながら五分位でフラワーパークに到着です。電車を利用してのお客様に、まずこのようなコースで土・日・祭日のお盆のおもてなし」と、今こんな小さな足のおもてなしを考えてみました。

走る走る小型バス

名付けて古都いしおか号

ちえこ

以上の文章は、二年前の平成二十年(二〇〇八

年四月)、当会報第二十三号に「バス運行の復活を」と題して掲載した一部分です。

その当時、石岡の観光スポットの一つである石岡駅からの常陸風土記の丘行きのコインバスが廃止され、電車でいらしたお客様や車の運転をなされない市民の皆さんへの足が閉ざされてしまったのでした。歴史ガイドに携わっていて、交通の不便さの訴えを耳にする事が少なくありませんでした。その後一年余り過ぎた頃に(平成二十一年)、嬉しい知らせが入りました。

「観光地としての市の魅力を多くの市民に知ってもらおうとともに、観光客の交通の利便性を高める為、九月〜十一月、平成二十二年四月〜六月の日曜日と祝日に観光巡回車を運行します」

乗車料金 大人(中学生以上) 一〇〇〇円
小学生五〇〇円

一日乗り放題

巡回コース

石岡駅バスターミナル発↓常陸風土記の丘↓体験型観光施設朝日里山学校↓茨城県フラワーパーク↓十三塚果樹団地(秋コースのみ)↓やさ温泉ゆりの郷↓茨城県フラワーパーク↓常陸風土記の丘↓石岡駅バスターミナル着。約一時間で巡回

乗車券販売

石岡駅前・市観光案内所、他各発着地(十三塚果樹団地は除く)

一日のバスの便は石岡駅バスターミナル発で、第一便の八時四十分から第七便の十六時十五分まで終了。

平成二十二年の春コースは四月〜六月、朝日里山学校近くの、フルーツラインでの苺の笑顔が思い出されます。

そして、九月より十一月、再び秋コースがやってきました。昨年の秋コースとの違いは運行曜日に土曜日が加わり、今回からの運行曜日は土・日・祝日となりました。

十月十六日(土)、景色と食を楽しもうと主人と体験してきました。行き先は十三塚果樹団地。

石岡駅バスターミナル第二便九時五十五分発に乗車。乗車場所は恋瀬姫の写真のあるポール。間もなく十人乗りのマイクロバスが到着。夫婦二組、七十代の婦人五人グループ、フラワーパークでの展示会に参加の女の方一人。定員オーバーとなり早速タクシー一台が二号車となる。

私達はマイクロバス一号に乗車、運転手さんの懇切丁寧な応対で気持ち良い出発です。(乗車券はバスの中でも可)

駅前の通りから香丸通り、そして若松町へ。風土記の丘には十分位で到着。二号車のお客様二人が下車され、タクシーは戻られた。マイクロバスには、お一人乗車。ふるさと農道を走り、いよいよ私の推薦する名勝、富士山と悠々とそびえ立つ筑波山に近づく。

今日は雲一つない青い空。ドキドキするような雄姿で迎えてくれた。ほどなくフラワーパーク近くの交差点へ。左折し朝日里山学校へ。ソバ打ちを期待しながら五人グループの皆さん下車。今来た道に戻るようにして五分ほどでフラワーパーク到着、お二人下車。車内は私達二人。又、五分ほどで、目的地、十三塚果樹団地到着。

小高い山々に抱かれて柿の実が葉陰から輝いている。丁度果樹組合の組合長さんにお話を聞くことができました。

今年の柿は少し遅れ気味で、十一月月上旬頃に柿

狩り用の「松本」が始め、中旬頃に「富有」になるとの事だった。

柿の葉も山々も色づく十一月中旬頃に「一匹の大鼠と十二匹の猫との戦い」の民話で知られている十三塚と赤滝を散策し、柿狩りをし、ゆっくりとゆりの郷の温泉を楽しまれるように又いらして下さいのことだった。

みつばちの交配で甘くなった柿を購入。購入したよりも多めのおまげが嬉しい。果樹園の皆さんとの触れ合いを楽しむ事一時間余り第三便(石岡駅ターミナル十一時十分発)到着。

「おまたせしました！」先ほどの運転手さんであつた。風土記の丘で下車したご夫婦が下りてくる。ほんの少しの出会いでしたのに挨拶しあう。

朝日里山学校で下りた五人の皆さんはおソバ食べられたらどうか。運転手さんに聞いたところ「残念ながら期待のソバはダメだったらしい、フラワーパーク見学して、ゆりの郷でゆっくりすると言っていました！」

バスの中にも八郷の里にも、とびっきりのあたたかい風がそよいでた。どうぞ、市民の皆さん、車生活からちよつと離れ、巡回バスで心のリフレッシュして見て下さい。そしてこのふるさとの宝物を皆さんにお薦め下さい。

あきらめない 願かならず叶う ちえい

《ふらいの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「つらら」ちゃん

皆さんをお迎えます。

電話0299-43-6888

筑波山奇岩怪石めぐり

小林幸枝

筑波山の奇岩怪石巡りに一度行ってみようと思つていたのですが、なかなか時間がつくれずのびのびになってしまつていた。休日、朝起きると天気良かったので、今行かないと又行けなくなつてしまふと思ひ、早速出かけることにした。

小学生の頃にロープウェイに乗つて女体山は見学したのですが、男体山とその他には行つた事がなかった。三十五年ぶりの筑波山は、紅葉はまだでしたが、さすがに東国の名山、秋の空気は爽やかで気持ちが良かった。

筑波山は、日本の百名山の中で最も低い山ですが、山の歴史は富士山よりも古く、美しさも富士山を凌ぐと思います。

この美しい山を楽しみながらの奇岩怪石巡りはとても楽しいものでした。男体山の頂上までの登りはきつかったが、頂上からの眺めは素晴らしかった。関東平野が眼下に広がり、昔江戸では、左に富士山、右に筑波山と言つたそうですが、関東には高い山はこの筑波山しかないのだという事が良く解りました。

女体山の頂上からは霞ヶ浦が見渡せる筈でしたが、残念ながら霞雲がかかつていて見渡すことが出来なかつた。

さてそれでは、筑波山の奇岩怪石を紹介しましょう。最初は『ガマ石』：大きく口を開けたガマ蛙に似た石である。このガマの口に小石を投げて入ったら幸福になるといわれています。私は早速試したところ、見事口の中に入ったのでした。私は間違ひなく幸福になれると思つた。

大仏岩：本当に大仏様そっくりの岩でしたが、

この大仏岩に来るまでの岩場の坂道が大変でした。屏風岩↓北斗岩↓裏面大黒岩↓出船入船岩↓国割り石↓紫雲石↓狭い岩の間を潜り抜けると若返るといわれている母の胎内くぐり↓高天原↓弁慶の七戻り岩：弁慶も此処を通るのに怖ろしくて七回も引き返したといわれる岩。

色々名前が付けられているようにとつても面白い岩巡りでした。

筑波山神社に戻る途中は鬱蒼と樹木が生い茂り、途中に白蛇弁天があつたりして、とても楽しく素晴らしい登山道でした。

これからの季節、紅葉を楽しみながらハイキングされると良いのではないでしょうか。

向こう岸

伊東弓子

長く続いた暑さの所為か、彼岸花も少し遅れて咲いた。その花の傍に座って筑波の峰を見ながら「山の彼方の空遠く、幸い住むと人のいう」の詩を口にしながらか秋風に吹かれていた。「此より向こうの方」にと夢を持つのが人の常ね。と一人言をいっていた。此の岸に立つて向こう岸を見ると誰か待っていてくれる様な気がする。向こう岸の人はどんな気持ちでこちらを見ているのだろう。

故郷の伝説に残る「籠ぬけ地蔵」「縄とき地蔵」の話を通して向こう岸へ行った人がどんな一生を送ったのだろうかと考えずにはいられないし、この地に住む人達はどんな気持ちで見送ったのだろうかと想像する。その中に「辰」の様な女もいたであろうと、私は人への思いを重ねてみたりする。

辰はその年、暑さの続いた中で体の衰えを感じていた。夏草の勢いもあまり感じずに秋草の柔らかな緑色の中にこの花の紅が一層鮮やかに見えた。曼珠沙華だ。この花の先の向こう場が見える。こうして向こう場を眺めながら三十年が過ぎようとしている。辰の胸の中には若葉の頃出会って、向こう場へ去って行った人の事が、いつも心に残っていた。

辰は、川風を受けながら過ぎ去った三十年の日々を思い浮かべていた。若かった辰の細腕に抱えきれない程の物を抱え込み始めた頃だった。しかし今はもう何も無い。

春、夏、秋、冬と何回も季節が辰の周りを巡っていた。芽吹きから蟬時雨、紅葉から雪化粧と繰り返された。その時々晴天から雲が湧き、雨天の後に月が輝き、大嵐に破戒され時冷たく霜に固まった時。様々な日々を過ごしてきた。休む事なく暦を捲って生活は続いた。畑を這い、田に屈み、土手を駆け、山を巡り、町迄走った日も送った。「ゆつくり歩いて」という時間はあつたらうか。

家族も次、次に去っていった。辰の下に産れた弟、妹は赤子の時に亡くなり、その後女の子を産んで後、肥立ちが悪く母ちゃんは育てる力もなく、その子が三つの時に亡くなった。細く弱々しい姿で笑うと美しくも見えた。何も持たない家だったから本家から貰う山仕事、田畑の仕事、家畜の世話、漁の手伝い何でもやって大黒柱として頑張った父ちゃんも息切れた。末っ子辰の妹の婚礼にも出られなかった。辰が三十になった時、妹は隣村の人に好まれて嫁にいった。本家の小作できた爺ちゃん山番をし、田畑の仕事をし、婆ちゃんは勝手場の事や縫物をし、暇があれば何でもして

た。一番丈夫だった二人も続いて亡くなった。気がついたら辰は既に四十を過ぎていた。失った家族を悲しんでいる暇はなかった。残っている借金を返すのに夢中で働く日々が続いた。残ったものは遣り遂げた思いと六つの墓だった。凡てを無くした。

人生も残り少なくなつたのだから、あの日の思い出の為に生きていこうと拳を握りしめた。答えてくれるかのように曼珠沙華が揺れた。今だからこそ私の願ひであつたものを手に入れようと決心した。こんな頑張ってこられたのは「いつかあの人の所に行こう」という願ひがあつたからだ。その願ひが辰の心に灯を点し続けていたからだ。

辰は三十年前のあの日の事を今もはっきり覚えている。あれは十九になつた花まつりの日の事だった。鬼子母神のご縁日でもあつた。風邪を曳いた妹も治り、端布で縫つた子供の着物とお札に竹の子粥をお供えした。境内はお詣りの人で賑わっていた。若葉の中を風は爽やかだった。坂を下り始めた。いつもは来た道を急いで戻つたがこの日は何かに導かれるかの様に反対側の坂を下りていった。足は大きな榎の木迄来た。人の声がある。大勢いる様子だ。何だろう、と群れの方へ入っていった。

「答人が来るんだとよ」
「どんな奴だ」

ざわついている中にそんな会話が聞こえてきた。
「来たど」

の声に今までの騒ぎは静まった。唐丸籠は目の前に止まった。髭、髪ものびて横からの姿ではよく解らない。年も定かではない。野次馬根性で弱い

人を見る、こういう私と恥ずかしい気もした。しーんとした中で皆の視線は籠の方に張り付けになっている。今迄もこういう事はあったが、怖ろしさもあり見てはいけないと思い、遠くに避けていたのに今日はどうした事だろう。男は籠から出て来た。足が草履に上手く届かず躓跚けた。その瞬間、辰は走り寄って咎人の手をとっていた。咎人は辰の手の支えで頭や顔を傷つけることもなかった。

「ありがとう」

と辰を見た。その瞳は清清しかった。声も出さず慌てて下った。「こんな綺麗な目をした人が悪い事をしたのだろうか。間違いではないだろうか」繰り返し繰り返し思った。家に戻る気にもなれず咎人の後についていった。舟に寄せられて向こう場に行くのだ。「何で罰を受けたのか」と見えなくなる迄、見送っていた辰だった。向こう場についてらどうなるのだろうか。小柄な体でこれから先大丈夫なのだろうか、と気になる日々が続いた。一瞬目が合っただけのその人何故惹かれるのだろうか。その一瞬の思い出が辰の人生を支えてくれたのだった。その人生も少なくなつた。願いを叶える為に用意する事にした。

決心してからの半年は今まで以上に真剣で慎重だった。夏の水の事故は多く悲しい墓標が増えた。十五夜の月の光も彼岸の太陽の沈む様子も此からは見納めになる。秋の長雨に打たれた田は黄金の波も色褪せていた。冬の猟はどうだろう。向こう場も地形が似ているから生活も早く慣れるかな等等と考えた。正月には先祖や本家、少しばかりの親戚に別れを告げた。農良の忙しくなる前に舟で行こう。あの人を捜すことが出来なかつたら、向こ

う場で暮らす事にしよう。元気で合えたら話して許されれば人生の残りを一緒に暮らしてほしいと頼もう。連れ合いや子供がいたら幸せを願って戻ってこよう。病気でいたら看病するのはあたりまえだが、もし亡くなっていたらどうしよう。その近くで墓を守って暮らそう。先の事はわからない。だからいろいろの事を考えてどんな状況であつても、対処出来るよう気持ちを確り持っていこう。

三月の縁日の日、あの時と同じ舟に乗って行く決めて家を出た。いつものようにお詣りした時、そこに赤子が置かれていた。おしめや着替え手紙も添えてあつた。辰は授かりものと心に決めてこれから苦労よりも喜びを体全体で受けとめて向こう場の灯りにむかつて舟に乗り込んだ。同じ舟に乗っていた男が

「俺が冗談言つたんだよ。おくれっ子かね」

「そうだよ。向こう場に父ちゃんが待つてんだよ」

と女は嬉しそうに赤子の頬を指で突いていた。

「幸せそうだったよ」

と聞かせてくれた。

その後戻つてきた姿を見た人はなかつた。盆や彼岸には六つの墓に花が手向けられていたそうだ。辰は此から眺めて願っていた幸せはあつたらうか。私は幸せになつたと思う。待つていてくれた人と二人であの子を育てたと思う。でなければ辰があまりにも哀れだ。現実はその旨くはいかないだろう。願い続けた事が少しでも願いに近づいてると信じていきたい。

向こう場からこちらを眺めてみよう。きっと新しい発見があると思う。今生活しているこの地の良い所も見えてくるだろう。

ギター文化館

2010 CONCERT SERIES

11月21日(日) PM3:00~福田進一ギターリサイタル

12月5日(日) PM3:00~アンドレイ・パルフィノビッチ
ギターリサイタル

12月12日(日) PM3:00~角圭司 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

Fax 0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で・・・

また大好きな雑木林に一摘みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

TEL0299-55-4411

訓練か躰(しつけ)かは知らないが、飼いだに「お預け」を必要以上に長くさせている人がいる。餌を目前にして期待に膨らんだ胸中が、次第に不安に変わる。犬は拷問にかけられているようなものである。人間でも期待外れは身体に悪い。

女性の方には叱られるかも知れないが、実話であるからご容赦を頂くとして、昭和二十年代に私の先輩が遠方の娘さんと結婚することになった。仲人が見せたカタログだけで合意をしたから結婚式で本人と会ってみるまでは細かいことが分からない。所帯を持ってから、新婚なのに職場ではなぜか浮かない顔をしていた。同僚が訳を聞いたら「どうも写真と違うようだ」とぼやいていた。

この場合は、仲人と写真館に罪があると思われるけれども、予想していたことと大きく違った結果が出れば誰でも失望したり落ち込んだりする。

「興亡の連鎖・その五」で述べたように、室町時代の元中間に鎌倉の命令で各地へ出陣したにもかかわらず、思いもかけず三か所の領地と河和田城とを取り上げられた大掾一族の心中も、それこそ腸(はらわた)が煮えくり返るようなものであったろう。尤も難台山の争乱当時は当主の大掾満幹が幼くて、補佐役が対応を誤った疑いもある。

「霞が浦湖岸の家から水戸まで、他人の土地を踏まずに行ける」と言われた資産家のことを聞いたことがあるが、全盛期の大掾氏は正にその通りであった。現在の水戸一高辺りには馬場資幹が築城したと伝えられる大掾氏の本城が置かれ、常陸国府に隣接する台地には足利尊氏時代の正平年間(西暦一三〇〇年代中ごろ)に築かれた府中城が

在って、水戸城から府中城までの間は笠間、宍戸近辺を除き大部分が大掾一族の領地であったと推定できるから、安心して往き来が出来た。

現在は石岡から水戸へ行く場合に多くは六号国道を利用するが「水戸街道」が通じたのは徳川家康が江戸にきた後のことである。それ迄の水戸に向かう道は現在のいわゆる「石塚街道」こと県道五十二号線(石岡・常北線)と三十号線(水戸・岩間線)などであったろう。

難台山事件の後で大掾満幹が没収され、そのまま江戸氏に与えられた河和田、鯉淵、赤尾関は、その水戸寄りの地域に固まっている。そして河和田には重臣の鍛冶弾正貞国(かじだんじょうさだくに)が築いた城があった。周囲が五、六〇メートル四方ぐらいの平城ながら、何重もの土塁と堀を巡らせたもので、何よりも交通の要衝に位置していたから失った大掾氏の痛手は大きかった。

貫ったほうの江戸氏は、早速に河和田城を強化して水戸城を牽制した。大掾満幹は自前の土地を通じて府中城から水戸城まで行け無くなっただけでなく、垣根の向こうに借金取りが住んでいるような不安を抱えるようになってしまった。

冷たい言い方だが、石岡市史も見放しているように常陸国の名門・大掾氏は世間から注目されることも無く水戸城と府中城の間を行き来し、大掾職という古びた権威にしがみ付き鹿嶋神宮がらみの伝統的神事を守ることに優越感を感じながら乱世に向かおうとしていた。大掾氏を没落させる原因を作った小山若丸は、しぶとく八年後に古河で再起したが、今度は目出度く退治された。

これで幕府の敵になった小山氏は消えるところなのだが同系の結城氏が継承し「興亡の連鎖・そ

の二」で述べたように「関東の八将」に入った。それどころか、多くの史書が難台山事件の主犯としている小田氏まで「関東の八将」に挙げられたのである。大掾氏は悔しいだけで何の変わりも無く、当主も変わらず満幹であった。

その頃に都では八歳の足利義持が將軍となり、前將軍の義満は金閣寺にうつつを抜かしていた。鎌倉の関東管領(かんとうかんれい)職は足利氏満から満兼を経て四代目の持氏に渡り、既に難台山城の争乱からは二十八年の歳月が流れていた。

このまま何事もなく過ぎれば良かったのだが「その一」で触れたように應永二十二年の春に筑波山麓・越幡の領主・越幡六郎信親が些細な罪で懲戒免職になるという出来事があった。

その結果「その三」「その四」で述べた「上杉禪秀の乱」が起こったのであるが、発端となった越幡六郎は小田系の武將であるから、難台山の事件で小田氏の巻き添えを食って失敗した大掾氏は、良く考えて慎重に行動すべきであった。しかし、パチンコで大損をした後のように、慌てて挽回を焦り、またしても対応を誤ったことになる。

上杉禪秀の乱で常陸国の武士団は行動が二つに割れた。佐竹氏、江戸氏、宍戸氏などは鎌倉方に付き大掾氏、小栗氏、真壁氏、山入氏などが禪秀側に加わった。しかし反乱軍は狙った敵の大將二人をそっくり逃がしたために、騒いだだけで司令部は壊滅、烏合の衆と化した武士団は、勢いを盛り返した鎌倉管領・足利持氏に帰順させられた。

この乱の鎮圧は京都の將軍・足利義持の命令で行われたから、降伏した武將たちは基本的に処罰を免れる筈であった。ところが、鎌倉の足利持氏は子供の將軍を馬鹿にしていた。越幡六郎の場合

と同様に、自分が気に入らない武将たちには勝手に重い罰を下すことにしたのである。「その四」で述べたように、足利持氏にしてみれば杉禅秀の息子・教朝（のりとも）を養子にし、また「京都御扶持衆」などと称して鎌倉を軽視している常陸国の大掾満幹や、自分に忠実な佐竹を敵とする山入與義（よりよし）は先ず許せない人物である。

大掾満幹にとつて悪いことには、上杉禅秀の乱が鎌倉管領だけで無く、京都の將軍まで倒す計画であったから「京都御扶持衆」が裏目になった。應永二十五年（一四一八）の正月早々には、幽閉されていた足利義嗣が京都で殺害された。上杉禅秀の乱に合わせて謀反を企んだ將軍の弟である。

その頃、上杉禅秀の乱で大掾満幹と共に戦った奥久慈の山入與義は、多くの家臣を失ったが帰国後も本家筋の佐竹氏に抵抗を続けていた。鎌倉から養子に入った佐竹の当主・義人は一族の紛争を避ける態度でいたから大きな争いにはならず済んでいたのだが、義人の兄・上杉憲基が執事である間はそれで済んだけれども憲基の病死で執事が替わり鎌倉府は管領・持氏を抑えきれなくなつてしまった。持氏は山入與義を鎌倉に出頭させた。

應永二十九年の秋も深まつたある日、僅かな人数で水戸城を訪れたのは、山入與義と嫡男の義郷（よしさと）らの主従である。鎌倉からの出頭命令で行くという。大掾満幹の妻は與義の妹であるから一行を満幹は丁重にもてなしたのだが、鎌倉の呼び出しに不審を感じ行くことを止めた。だが、豪胆な與義はその心配を笑い飛ばした。

「心配は忝いが、よもや鎌倉も卑劣なことは致すまい：恐らく佐竹が動いたのでござろう。騒動が長引いては困ると考えた義人が甥の執事を動

かし和解させる心算とみており申す：」

一行は翌朝早く水戸城を出て鎌倉へ向かった。十月二十二日に鎌倉へ到着した一行は、佐竹屋敷に入るように言われた。そして大掾満幹が案じたとおり、その夜のうちに鎌倉管領・足利持氏の命令を受けた上杉の軍勢が屋敷を取り巻いた。

「與義一人の首を差し出せば危害を加えない」という申し出を拒んだ一同は、近くの法華堂に籠つて自害したと言われる。悲報は水戸にも伝わり、満幹夫妻は何としても鎌倉行きを止めるべきであったと悔やんだのである。

同じ頃に、一通の公文書が常陸国府に届いた。宛名は常陸国大掾職である。大掾満幹は引き続き水戸城に居た。山入與義の殺害もあり、佐竹氏、江戸氏など反乱追討軍として敵に回していた連中の動向が気になるからである。府中城から早馬で届けられた文書を開封して満幹は驚いた。それは常陸国内の裁判権を持つ大掾氏に対して「大掾満幹の処罰」を命じる文書だったのである。

自分で自分を処罰する：何が何だか分からないが、その内容は次のようなものであった。「：上杉禅秀の反乱に加担したことの罰として水戸城及びその領地を没収する。特に温情を以て平満幹を常陸大掾の職に留め府中城に居城することを許す。深く反省して鎌倉への忠勤を尽くすべし：」差出人は鎌倉執事代理の上杉憲実となつていた。

重臣たちは愕然としたが、難台山で没収されることに慣れていた満幹は、平静を装い鼻の先で笑つてから忌まわしい手紙を屑籠に放り込んだ。

「我らは京御扶持衆なるぞ、鎌倉に罰せられる筋合いは無い」

胸を張つたが、良く考えてみると京都まで敵に

回してしまった京都御扶持衆は、自分の足場を切り離れた大工みたいなもので、落ちるしかない。

「：鎌倉へは何と答えましようや：」

心配して尋ねる重臣に対して満幹は適切な指示を迅速に出した。

「放つておけ。小栗殿にこのことを伝えよ。城の護りを固め、特に佐竹の動きには注意せよ：」

この指示は適切ではあったが、少し的（まと）が外れていたのである。大掾満幹は、常陸太田城の佐竹義人が上杉禅秀の乱で追討軍として活躍し、今回も山入與義一行の殺害に関与したので褒賞として水戸城を欲しがっていると思つていた。そのため水戸城と近辺の領土を没収するという大掾氏処分案は、義人の兄が管領に進言したものだと思つて決めたのである。これは違つていた。上杉憲基は、その年の正月早々に二十七歳の若さで他界しており、大掾満幹処罰の命令が執事代理で出されたのはその為であった。

佐竹氏を相続した義人は周囲の反発を考慮して一族の山入與義の反乱参加にも目を瞑つていたほどであり水戸城などに野心は無かつた：では、誰が水戸を狙つたのか？程なく鎌倉から指示があり「水戸城及び近辺の領土は江戸通房に引き渡すべし」と言われて大掾満幹は気づいたのである。

「江戸」と聞いて満幹は難台山の屈辱を思い出し、改めて怒りが湧いてきたけれども、今回は鎌倉の命令などに従うつもりはない。水戸城の警護を固め江戸氏の動きを厳重に監視していた。江戸氏のことは「その五」の「あとがき」を見て頂くとして、出陣した多くの武将たちの中で特別な働きがあつた記録もない江戸通房が、なぜ水戸城などを貰うことが出来たのか謎は多い。足利持氏に

とつては憎たらしい満幹から取り上げることだけが目的だったのであろうけれども、それが江戸氏に渡るには何らかの裏の理由があった筈である。

江戸通房は早速、大掾満幹に水戸城の明け渡しを要求してきたが、満幹はこれを無視した。新興勢力の通房も武力で攻め取る力は無い。双方が緊張した状態は暫く続いた。そのうちに江戸氏側では戦法を変えて「雪解け作戦」に切り替え、水戸を諦めたような態度を示し平和条約を持ち掛けてきた。縁談という名の人名として通房の娘が水戸城に送り込まれてきた。この女性が冒頭に述べた「ミス・カタログ」のような写真館泣かせであれば変化は起こらないのだが、そこそこの美人であったから満幹も気を許し「水戸城が狙われている」という緊張感が少しづつ薄れていったのである。

そういつた中で、應永三十年には小栗城の小栗満重が鎌倉に抵抗して立て籠り、これを足利持氏が宍戸氏に攻めさせる出来事があった。この時に大掾満幹は京都の將軍から命じられて「戦況報告書」をしている、持氏が何を仕出かすか分からないので監視するように言われたのであろう。満幹は上杉禪秀の乱に加わったことを改めて將軍にお詫びした。小栗氏は大掾支流であるが、府中城の大掾氏よりは、余程本流に近い。そのために落城するまで抵抗を続け「小栗十勇士」などの活躍が後世に物語として伝えられている。大掾満幹の報告書には「…寄せ手（鎌倉）の八十人がその場で討たれた。怪我人はその数が分からないほど多い。城方は戦死者一人…」と記録されている。

應永三十三年六月、石岡では国府構内に接する府中城の広場で青屋神社の祭祀行事が厳かに行われていた…と書いたが、この出来事には應永三十

三年（一四二六）説と應永二十九年（一四二二）説があり石岡市史などは後者としている。三十三年説をとる史書が多いけれども、どちらが正しいのか？前後の出来事を考えると次のような状況が浮かんでくる：山入與義殺害が應永二十九年であり同時に大掾氏への処罰が決まったとすれば水戸城など没収が言い渡されたのが應永二十九年、しかし大掾氏はこれを無視した。江戸氏は仕方なく我慢を続け、應永三十三年に絶好の機会を生かし水戸城を奪った…と考えたい。

青屋祭は鎌倉時代の正安二年（一三〇〇）から始められたと伝えられるもので、大掾氏の任務の一つとして大掾氏の宗主が主催しなければならぬい神事であったらしい。水戸城が危なかつた此処何年かは止むを得ず一門の代理で済ませていた。しかし、江戸氏も服従する態度を示し、人質も来ていることなので、今年は久し振りに参列しないと神様に怒られる。應永三十三年、大掾満幹は信頼の置ける重臣に留守を託し、念の為に特別警備態勢を執るように指示をしてから、大掾一族と主だった武将を率いて水戸城を留守にした。六月二十一日のことである。

祭事は無事に終わった。府中には大掾系の税所（さいしよ）氏ほか、歴代重臣である弓削（ゆげ）氏、香丸氏、金丸氏などが居る。久々に領主の顔を見た家臣たちは次々に拝謁を願ひ出て挨拶を述べる。満幹も久しく水戸城に詰めていたので国府がらみの書類に目を通したりして忙しかった。

初めのうちこそ、早く水戸に戻らねばと思つてはいたのだが二日、三日と滞在するうちに酒宴も開かれ、ついつい寛いだ気分になった。そこへ城の外から早駆けで近づいて来る馬蹄の響きがあり

「早馬が参ります」と見張りの兵が叫んだ。「ご注進！一大事にござる」と叫びながら駆け込んで来た武者は埃まみれの身体に手傷を負つて息も絶え絶えであった。

「何事ぞ！」鎌倉の命令を無視したことを忘れていた満幹は「一大事」の内容が思いつかない。

「江戸但馬守が押し寄せ、城が奪われました」予想もしなかつた事態に「何、なぜ江戸めが…」満幹は言い掛けでハッと気づき、さらに愕然として言葉を失った。江戸通房が持ち掛けてきた平和交渉には、やはり裏があつたのか：満幹の脳裏には一瞬だが人質として来た美人の顔が浮かんだ。

満幹は「馬引け！」と叫んで、ふらつく身体に鎧兜を着け、勤務時間外で不服そうな馬に跨るや飲酒乗馬で捕まることを覚悟して、水戸城に向かつたのである。しかし既に手遅れで、暗闇のなか途中の街道を落ち伸びて来る水戸の家臣たちは如何にも命からがら逃げて来た様子で口々に「水戸落城」を伝えたのである。

こうして水戸城と近辺の領地は鎌倉の命令どおりに江戸氏の所有するところとなった。馬場資幹以来の大掾氏は、僅かに府中城と近辺領地にしがみ付くだけの地方小武士団に成り下がった。馬場系の大掾氏にとつては本城とも言うべき水戸を失つた満幹は、失意のあまり暫くは呆然とした日々を送っていた。「江戸通房に奪われた」とは言つても鎌倉の命令を無視した結果であるから兵力を集めて奪い返す訳にもいかない。水戸方面には大掾系の武将も残っていたから「いつかは取り返して見せる…」と、筑波山を間近に密かな決意をしながら府中城を守っていた。

寂しくはなつたが大掾満幹のほうはそれで良い

として逆に腹の虫が治まらなかつたのは鎌倉の足利持氏である。自分が発した「水戸城などを江戸通房に渡せ」という命令が護られず、江戸氏が自力で奪い取つたとなると、関東の武士団を統括する鎌倉管領の権威が踏みにじられたことになる。

その所為かどうか、山入氏のほか宇都宮、小栗などの武将たちが抵抗する構えを見せている。これは大掾満幹への処罰を嵩上げしなければ：

應永年間が三十四年で終り、次の正長元年には都の將軍が正月に急死したため「その一」に述べた將軍選出の籤引きが行われ、一旦は坊さんになつた義圓が將軍に選ばれた。鎌倉で事前運動を展開していた足利持氏は全く無視された怒りで謀反を思い立つた。しかし上杉禪秀の場合と違つて同調者が集まらず不発に終わつてしまつた。その怨みを何処かに向けようとしていたところ、丁度良く常陸国の大掾満幹が見つかった。

永享元年（一四一九）も残り少ない師走の初め、大掾満幹は突然、鎌倉から「嫡子・慶松（よしまつ）を伴い鎌倉に出頭せよ」と言われた。その少し前にライバルの佐竹氏から頼まれて一枚の紙に署名捺印をしたのだが、それは足利持氏の叔父で東北支店長をしている足利満貞が、管領の持氏を糾弾する連判状で、佐竹はじめ多くの武士が賛成していた。そのことが漏れるには早すぎるし万一、漏れても大部分の関東武士が関与していることであるから、何かあれば軍勢が鎌倉に押し寄せてくることになつてゐる―そのことではない。

他に怒られそうなことと言えば、命令を無視したことだが、形はどうでも、水戸城が江戸通房に渡つたのであるから、今さら鎌倉に呼ばれるのは別な用件であらう：將軍に言われて、合戦には参

加しなかつたが小栗城では「国連の監視団」のよな仕事もしているし、常陸大掾職として鹿嶋神宮の造営を命じられるのかも知れない：山入與義のこともあるから、ここは疑つてかかるべきなのだ、満幹はそれをしなかつた。

府中城から鎌倉までは四日の行程である。満幹父子の一行は空つ風に曝されたが天候に恵まれて予定どおりに鎌倉へ着いた。取り敢えず鎌倉府の庁舎に向いて堂々と「常陸の大掾満幹が到着致した」と申し入れたのだが、受付の役人は怪訝な顔で「何の用か？」と言うような態度を示した。

満幹は立腹気味に、送られてきた「召喚状」を見せると、管領・足利持氏のサインがあつたから役人は腰を抜かすように驚いて一室へ案内し上役の許へ報告に行った。底冷えのする鎌倉で火鉢も無く、寒さが身に沁みる。「こんなことなら来なければ良かった」と思い始めた頃に、玄關のほうから荒々しい足音が響き、五十人ほどの武者が踏み込んできて満幹主従を取り囲んだ。

「無礼であろう！」満幹の怒鳴る声は風音に消され引き立てられて一キロほど歩かされた。着いた場所は鶴岡八幡宮の裏手にある谷間・雪の下の宝性院跡である。思えば此の地は十二年前に上杉禪秀らが最後を遂げた場所：そこに建てられた仮の小屋に放り込まれ、いつの間にか周りを軍勢が固めていた。永享元年十二月十三日の朝、雪の下を吹き抜ける冷たい風が一瞬、血腥い風になり、大掾満幹らは生きて故郷へ戻ることは無かつた。

彼らが聞いた最後の声は「：常陸の大掾は名門とか、案ずるが良い一族に相続は許す。安心して地獄へ行け！」と憎たらしく叫ぶ関東管領・足利持氏の罵声であつた。（興亡の連鎖・終り）

（間連資料）

「滅亡のあとさき」

大掾満幹と嫡子の慶松（よしまつ）及び同行した家臣たちが鎌倉管領・足利持氏により殺害された知らせは、密かに京都の室町幕府第六代將軍・足利義教（よしのり）の耳に達していた。東国の武士団は組織としては鎌倉府に属しているが全て將軍の指揮下に置かれる。鎌倉管領の地位は足利一族ではあつても幕府一機関の長に過ぎない。

しかし足利持氏は、自分が將軍になりたくて仕方ない人物であつたから、自分の立場をわきまえず、將軍を無視し將軍（第四代の義持、第五代の義量）と張り合う姿勢を続けてきた。このために義持は関東の有力な武士団を「京都御扶持衆」に指定して鎌倉を牽制していた。

ところが應永二十三年に、鎌倉管領を補佐する執事の職にあつた上杉氏憲（禪秀）と持氏との対立が起こり持氏は將軍の了承も受けずに氏憲を解任してしまつた。憤懣やるかたない氏憲に対して將軍・義持の弟で、やはり「將軍になりたい病」にかかつた足利義嗣が都から謀反を勧め、東国の武士団が二つに分かれて戦う「上杉禪秀の乱」が起こつた。裏には上杉一族の権力争いもあつたのだが、事件のきっかけとなつたのは石岡市（八郷町）小幡の領主で小田一族の越幡六郎が犯した軽い罪に対する鎌倉管領の過酷な処罰にあつた。

それより二十年ほど前に起こつた小田一族と小山一族の南朝殘党による「難台山城立て籠り」と共に、石岡近辺に発生した出来事が多かれ少なかれ東国の武士団に影響を与えたことになるのだが、地元であることから府中城にいた大掾氏は嫌でも争いの渦に巻き込まれる。その挙句に先ず赤塚、

内原近辺の領地を削られ、水戸城と付随する領地を奪われ、最後には呼び出されて交通費も貰わずに鎌倉まで行った大掾満幹父子と従った家臣が雪の下で生命を取られてしまったのである。

將軍の足利義教は前將軍・義持の弟で謀反を計画した義嗣の弟になる。初めは「義宣(よしのぶ)」と名乗ったが「よしのぶ」が「世をしのぶ」に通じ、縁起が悪いと「義教(よしのり)」に変えたと言われる。抽選会で選ばれた將軍であるから鎌倉の持氏は従来にも増して馬鹿にしていた。新將軍は子供の頃から比叡山にいたので鎌倉の事情には疎いが、重臣たちから聞いて管領の足利持氏が自分を軽視していることは知っている。

大掾満幹らが殺害された年の夏に京都で第一〇二代・後花園天皇の即位礼が行われたが、前例を無視して鎌倉からは祝賀の使者を送らなかった。あまつさえ大軍が京都へ攻めのぼる風聞もあり、就任早々ではあったが、見かねた將軍が鎌倉管領を叱る文書を携えた使者を遣わした。ところが、使者は途中で賊に襲われ鎌倉に行けなかった。賊が奪ったのは「鎌倉管領を叱る將軍の文書」であったから、賊の背後に持氏の影がちらつく。それが永享元年(一四二九)のことだが、持氏は年号も変えず、古い年号で押し通すなど、鎌倉に別な政府が在るような状態であった。

足利義教が鎌倉で起こった「大掾満幹父子殺害事件」の知らせを聞いたのは朝廷から將軍の任命を受けた後である。放つては置けないが、將軍になつて間もないから武將たちの動きが読めない。鎌倉に味方する者もいる筈である。

しかし「興亡の連鎖・その一(本文)」でも述べたように、最初は猫を被っていた義教は次第に「恐

い將軍」に変身してゆく。六年前に先代の將軍が持氏の征伐を決め幕府軍を鎌倉へ向けた際の資料を取り寄せて参考にしていた。その時は、慌てた持氏が「ゴメンナサイ」と簡単に降伏したことも聞いているから「性懲りもない奴」と、いずれは鎌倉を潰す決意を固めていた。

永享三年には、取り敢えず鎌倉の仏教界を管領から引き離すために「関東護持奉行」として高僧を鎌倉に派遣した。そして翌年の秋には、突如として「富士山を見に行く」と言い出した。將軍が遠方へ出かけるとなると準備も大変であるし何よりも費用が莫大な金額になる。現在の政府ほどではないが借金を抱えていた幕府の重臣たちは腰を抜かし口を揃えて止めた。

「今は少し落ち着いていますが、戦乱の兆しが消えぬこの時に、將軍は一日たりとも都を留守にすることは叶いません……」

現代は「予算の無駄をなくす仕分け」を行いなから、片方では大臣たちが、くだらない用で海外へ出かける。「富士山をご覧になりたければ有名な絵描きに富士を描かせますから、どうか行くのは止めてください……」と將軍に頼んだ室町時代の重臣たちは偉かった——外国へ行きなければ旅行会社のカタログで我慢しろ！三流大臣……

それでも將軍・義教はきかなかつた。將軍の本心は、自分で鎌倉の出方を見るつもりなのだが……結局は永享四年九月十日に京都を出発した一行は征夷大將軍・足利義教に従う六千余騎の武者たちに何名かの公家も供奉して、それぞれが煌びやかに飾り立て行列を成して東海道を下った。

一行は七日かけて現在の藤枝に着き、駿河国守護の今川駿河守範政が、鬼岩寺という寺の一角に

仮御殿を新築して迎えた。現地では富士山の由来を知る山伏に物語をさせ、富士を題にして和歌を詠みあうなどして大方は酒宴で時を過ごし、鎌倉の出方を観察した。本来は鎌倉管領の足利持氏が仮御所に出頭しなければならぬのだが、理由をつけて鎌倉執事の上杉憲実を名代に遣わした。

上杉憲実は、上杉禪秀の乱で禪秀に攻められた上杉憲基の従兄弟なのだが養子となって執事職を継いだ。將軍と將軍を無視する持氏との間に立ちあれこれと苦勞をしたが、やがて態度を改めない持氏を見限り幕府に従って鎌倉府を滅亡に追い込んだ。それを罪惡として僧となり諸国を流浪したという。しかし行動に謎が多いとされる。

その憲実の努力もあつて今回は合戦には至らず、將軍は都へ戻ったが、京都と鎌倉の対立が緩和された訳ではない。両方とも、もし合戦になった場合、相互に味方する有力武將たちの動向が予測できないだけのことである。しかし將軍の富士遊覧が鎌倉に威圧を与えたことは確かである。

富士遊覧に先立つて幕府の重臣たちが心配したように、それから数年間は各地で小さな合戦が起きたが、その中には鎌倉の足利持氏が勝手に気に入らない武將を攻めさせた戦もある。そして永享十年の六月に、鎌倉では足利持氏と上杉憲実の間に深い溝を生じる出来事が起こった。

武將の子が元服する際には、主に主筋の武將から冠を付けて貰う儀式が伝統的に行われていた。足利持氏の嫡男・賢王丸が十三歳となり、元服を迎えていた。憲実が伝統に従い、賢王丸の加冠を將軍に願ひ、その一字を名前に貰うように進言をしたが持氏は無視した。憲実の將軍寄りが気に入らず、また將軍憎しの感情も直っていないから鶴

岡八幡宮で元服式を挙げさせ、名前は先祖の八幡太郎義家から「義」の一字を貰ったとして「義久」と命名した。将軍も義教であるから、将軍から貰ったと言えは済むところなのだが：

諸国からお祝いに駆け付けた武将たちにもそのように公言をしたので、将軍の権威は大きく傷つけられることになったのである。集まって来た武将の中には将軍との不和を助長するような行動を勧めて上杉謙実を退けられていた何名かが居り、彼らはこの機会に謙実を陥れようと図った。

このことから鎌倉管領・足利持氏と、鎌倉執事・上杉憲実との間に決定的な不和が生じ、憲実は自分の領地である上野国の白井城に引退した。現在の沼田市付近と思われる。これに対して持氏は主君への反逆として、直ちに憲実討伐の軍勢を差し向けたのだが、この機会を待っていた将軍は関東武士団に「持氏討伐」を命じ、また京都からも大軍が鎌倉征伐に東海道を進んできた。その指揮官は上杉持房、この人物は「上杉禪秀の乱」の首謀者・禪秀こと上杉氏憲の遺児である。

永享十一年（一四三九）二月十日、関東管領・足利持氏は「将軍になる野望」を果たすことなく鎌倉の永安寺（ようあんじ）という寺の三重塔で家族と共に殺害された。この時に辛うじて逃れた遺児たちが、後に結城氏に擁立され合戦を経て関東に足利氏の子孫を伝えることになる。

持氏追討の軍勢に指揮官の補佐役として従っていたのが上杉持房の弟・教朝である。教朝は大掾満幹の養子で府中城に居たことがある。上杉禪秀の乱では兄と共に鎌倉を逃れて将軍を頼り、そのまま幕府に仕えていた。満幹が鎌倉で殺害されてから十年、仇討をしたことにはなるのだが：

興亡の連鎖 その六（付録）

「青屋神社と大掾氏」

一族が護る小さな城は別にして水戸城と府中城と二つの大きな城を持ち、水戸・府中間に領地を持つていた大掾満幹は、まず難台山城攻防戦の後（一六）から翌年にかけて起こった上杉禪秀の乱に赤塚近辺の領地を削られ、應永二十三年（一四一六）から翌年にかけて起こった上杉禪秀の乱に加担して水戸城などを没収された。いずれも京都の将軍は関知せず鎌倉管領の独断である。貰うことになったのは那珂川上流域に進出してきた江戸氏（旧姓・那珂氏＝藤原秀郷系）である。しかし大掾満幹は水戸城の時に鎌倉の命令を無視して引き渡すに応じなかった。

江戸氏の当主・通房は隠忍自重して策略を巡らし、大掾満幹を油断させた。十年後の應永三十三年（應永二十九年説もあるが）六月、大掾満幹とその一族及び重臣たちが、青屋祭執行のため水戸城を留守にしたことを知った江戸氏は「千載一遇の好機」として水戸城を奇襲し、これを奪ったのである。この時に江戸氏の軍勢は主力が河和田城から少しづつ現在の茨城県庁舎付近を回って千波湖の対岸に集結していた。

一方、別動隊は県道水戸・岩間線辺りを抜けて水戸城の近くに潜伏した。様子を窺うと大手門、堀め手門ともに開いたまま番人も居眠りをしていようであった。城主や主な武将たちが留守なので「護りを厳しくせよ」と言われたことが守られていない。むしろ「鬼の居ぬ間に洗濯」の気分であったようである。「常総戦蹟」には「月未だ出でず、仰げば大空紺青色に澄みて風いと涼し」とあるから、風流な気分でも門を開けはなち城内に風を入れ、月の出を待っていたのかも知れない。

「かかれ！」江戸通房の号令で二つの門から攻め込んだ軍勢に城方は真ともな対応ができない。討たれなかった城兵は堀に飛び込んで逃げたのが精一杯で瞬く間に水戸城は江戸氏の城となった。大掾満幹ら主な幹部は「青屋祭」のために府中城へ来ていたから、留守中に借金取りが押し掛けて家屋敷を差し押さえられたようなもので、苦情を訴え出ることも出来ない。石岡市史には「大掾氏と青屋祭」のことが何ページにも書かれているが、城を失うほど重要な行事であったのか？

青屋祭の起源は「国司の鹿嶋神宮巡拝にあたり天候不順で高浜から船が出せない場合、青草で葺きあげた仮殿を造り、遙拝したこと」とされているが、その際に「ススキの箸で鰻鮓を食べる」という民族行事との関係が怪しい。

国学院大学教授が編纂された「年中行事辞典」には「青屋様の神事」として次のように書かれている。「：茨城県新治・行方両郡で七月二十一日の行事。アオバシノヒ（青箸の日）ともいう。うどんを作り、すすきの箸で食べる。茨城県の鹿島神宮には旧六月二十一日に祭神に薄の箸を供える神事があり、これを青屋箸の神事と称する。民衆もこれにならって、この日はなす・瓜・豆等の初物を食う。この日に祭神が大和の春日神社へ遷幸したが、春日では突然の事とて、とりあえず有り合わせの薄の箸に青物をそえて進じた故事によるものと伝える。石岡市では旧暦六月二十一日に青屋祇園と言って行うのも同じ行事で、すすきの箸を作り、うどんを食べてまっる…」

傍線の部分を念頭に置いて考えると、春日大社が奈良に勧請された当初は藤原京の東にある阿倍山の麓に置かれたのである。「神様を祀るから準備

【風の談笑室】

しろ」と命じられた地元の人たちは、急なことで社殿の建立が間に合わない。「仮殿で良い」と言われ蒼薄の社を造り地元で採れた青物を供えた。其処は「三輪素麵（みわそうめん）」の本場である。「ありあわせ」で供えた中に地元で作られる麺類があっても不思議ではない。

春日大社は「平城遷都」により現在の春日山西麓に移されたが「青屋の神事」は受け継がれた。いつの時代にか、春日大社の神事が鹿島神宮に逆輸入され、それが、仏教の興隆で神社と言うよりも寺院のようになった鹿嶋神宮から常陸国府の大掾氏に押し付けられたものように思える。

大掾氏のほうでも「桓武平氏の源流である」などと自慢してみても平氏が源氏に滅ぼされた後は、今一つ迫力が足りない。そこで鹿嶋神宮の権威にすがって青屋の神事を継承していくことで、他の豪族とは違うことを誇示したかったのか？

しかし、室町時代から戦国時代へと大きく変革する時代、下克上の思想を反映して古い権威などは何の価値も持たなくなり、大掾氏は青屋の神事に来ていた留守に城を失ったのである。

現在の青屋神社祭神は「天照大神」と「うがやふきあえずのみこと」とされている。藤原氏が青屋に勧請した神々は武甕槌命、経津主命、天兒屋根命、比売命の四柱であるから、青屋祭が鹿島神宮ゆかりの伝統行事であるならば祭神も正しく伝わらねばならない。天照大神はともかく鶴茸草葺不合命というのは「青屋」にこじつけた祭神に思えてならない。安産の神様が国司の鹿島遥拝とどういう関係があるのだろうか？水戸城を失った大掾氏の為にも知りたいものである。

月日の流れは速いものである。異常の酷暑を怨む話をしていたと思ったら、突然の寒さがやって来て、今朝は車の屋根に霜が降りて真っ白になっていた。

十月末のこと。ギター文化館へ行き来年のスケジュールを決めて来た。来年のことは座の公演は今年と同様、六月と十一月の二回、それぞれ三日間公演を行う事となった。その他に、ことば座企画で、野口喜広のオカリナと白井啓治の詩の朗読コンサートを三月と九月の二回行う事にした。このコンサートは、ギター文化館協賛でギター文化館のコンサートシリーズに組み入れてもらう事となった。

ギター文化館の木下館長とは良く話をするのであるが、何でも良いからこのふる里発信の文化事業を起こして行かなければ、常世の国が常世の国でなくなり、まほろばの里がまほろばの里でなくなってしまう、と。

歴史の里とは言いながら歴史を大切にしない里ではあるが、何か新しい文化の声が聞こえ始めたら、都合の良い部分の歴史しか見向きもしなかった人達にも、足元の消えかかっている大事な歴史文化の遺産を見直すきっかけになるかもしれない。そんな思いの中で、野口喜広さんが常世の国の大地の土で造った土笛（オカリナ）で奏でる常世の国の風のメロディーとことば座のしらあひろちが朗読する風の声詩とのコラボレーションです。

会報に発表した文をまとめた風の文庫の新刊が

出来あがります。打田昇三作「興亡の連鎖」、菅原茂美作「遙かなる旅路(Ⅲ)」、伊東弓子作「風に思う」の三冊です。

少し遅れて、来年の三月頃までには兼平ちえこ作の「石岡歴史散策(仮題)」が自身のスケッチ画(風のことば絵)を挿入して完成します。本格的な歴史の里ガイドブックとなります。

さて九月頃から、打田さんが「虚構と真実の谷間(歴史の嘘)」をテーマにして、千枚超のふる里歴史物語に挑戦されております。先日、事務局の方に三百枚程の原稿が届き、拝見しましたが大変に面白い物語になっています。仕上がりはおそらく千二〜三百枚程の作品になるのではないかと思います。

今年も残り一ヶ月となりましたが、振りかえると今年は風の会やことば座には、非常に充実した年になったようです。朗読舞の小林幸枝の可能性が大きく広がり、ことば座特別研修生の兼平良雄さんは、この石岡にこそ語られるべきである「平家物語」全百二十句の朗読への挑戦をスタートさせ、打田さんは歴史の嘘という一大巨編への挑戦。小さな小さな集まりではあるが、希望だけは世界一と自画自賛。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」第26話

難台山城 落城哀歌

11月12、13、14日(午後2時開演)

「たとえ命落すとも、そなたを思い、子を思う我が心は消えぬ。狐に姿をかりても必ずや逢いに参らむ。子忍の森に我を待て！」 鴨長明の「方丈記」に導かれて、難台山城の希望なき争乱の影に残された武将の妻の哀歌を、手話の舞に舞う。

古里に生まれた新しい舞台表現「朗読舞」の女優小林幸枝が

舞の表現スケールを益々にアップして、常世の国に語り伝わる

南北朝争乱の秘話を舞い演じます。

生涯学習として平家物語全句朗読に挑戦する
兼平良雄(ことば座特別研修生)第二回朗読会。

「平家物語第百二句 扇の的」同時上演。

脚本：演出 白井 啓治
音楽：効果 野口 喜広(オカリナアート JOY)
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗読 しらみひろぢ
舞技 小林 幸枝

入場料3000円(中学生2000円 小学生1500円) 入場券は、ギター文化館 0299-46-2467
いしおか補聴器 0299-24-3881にて取扱っております。

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎募集要項
- 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
 - 募集人員：6名程度(最大10名まで)※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
 - 養成期間：1年間(入塾は随時受付しています)
 - 指導月4~6回
 - 受講料：月額30,000円(全・半納割引有り)
 - ※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当：白井)までお問い合わせください。